



感情労働を伴う看護師の共感満足と共感疲労への対処に関する研究

著者	太田（平野） 真紀
内容記述	この博士論文は内容の要約のみ公表しています
発行年	2014
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2013
報告番号	12102甲第6992号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00124066

論文概要

○論文題目 感情労働を伴う看護師の共感満足・共感疲労への対処に関する研究

○指導教員 人間総合科学研究科看護科学専攻 安梅勅江 教授

(所属) 筑波大学大学院人間総合科学研究科看護科学専攻（博士後期課程）

(氏名) 太田（平野）真紀

目的： 看護師はケアを職とする職業である。ケアの対象である他者とケアする人との相互関係の相互関係のなかに「感情労働」が生じると言われる。感情労働は「自分の感情を誘発したり抑制したりしながら、相手の中に適切な精神状態を作り出すために、自分の外見を維持する」努力と定義される。看護師は病いを抱え、健康な心身の状態ではない人を対象とし、また対象者の生死を身近に扱う職業であるという特徴があり、感情管理が求められる局面が多く、結果的に共感疲労を起こしやすいことが指摘される。こうした背景から、現在、看護実践における感情労働と共感疲労への関心が高まっている。

本研究は、感情労働を伴う看護師の共感満足・共感疲労への対処について質的、量的に検討することにより、看護職に求められる教育プログラムの内容について明らかにすることを目的とする。

対象と方法： 本研究は、看護師の感情労働への対処の実態を質的に検討する「研究1」及び共感満足・共感疲労への対処に情動知能を活用する仮説を量的に検討する「研究2」を実施した。

研究1では、看護師の感情が揺さぶられるような場面への対処の実態を明らかにするため、質的研究を行った。感情労働の実態について半構造化面接を行った。面接内容における質問項目としては、「日常の臨床業務における感情労働について」、「感情労働の認識について」、「感情労働への対処方法について」等について尋ね、質的記述的分析を行った。

研究2では、情動知能を活用し、看護師の共感満足向上と共感疲労低減するための検討として、情動知能が共感満足及び共感疲労に及ぼす影響を明らかにすることを目的として量的な横断調査を行った。調査方法は、情動知能及び共感満足・共感疲労に関する質問紙調査を実施し、情動知能と共感満足・共感疲労の関連分析を行い、看護師の共感満足・共感疲労感情労働への関連因子を探索し、情動知能による説明モデルの妥当性を検証した。

結果：【研究1】

地域での中核病院である総合病院に勤務する一定程度の経験をもつ（職業経験10年以上）看護師を対象として、12名の半構造化面接調査を行った。

看護師の感情労働への対処について分析した結果、【学ぶ】、【入り込む】、【役割を自覚する】、【共有の場を活かす】、【切り替えの工夫をする】、【倫

理的な問題に対峙する】、【生命と向き合う責任感をもつ】がカテゴリー化された。

【研究 2】

質問紙の配布数は 1,490 部であり、回収率は 72.4% (回収数 1,079 部)、そのうち質問項目全てに回答した 1,009 名を分析対象とした。

この結果、情動知能と共感満足及び共感疲労の関連では、情動知能と共感満足は正の相関関係 ($r=0.59$, $p<0.001$) があった。一方、情動知能と共感疲労は有意な相関関係が見られなかった ($r=-0.06$, $p<0.061$)。相関分析の結果を受け、従属変数を共感満足、独立変数を情動知能として重回帰分析を行った結果、情動知能は共感満足に関連していた ($\beta=0.571$, $p<0.001$)。また R^2 は 0.351 であった。モデルは適合することが確認された。

考 察：【研究 1】

感情労働への対処には、对患者に対応する際に対処のみならず、倫理的な課題への対処が必要とされていることが明らかとなった。医療の選択において、看護は調整者としてかわる役割を果たす。患者の自律性の程度が不明な場合、患者本人の QOL を考察する際に何を基準に、また何を指針としてよいかは困難な課題であり、この状況に対応するためには、組織的な方策が求められる。

【研究 2】

情動知能が共感満足・共感疲労に及ぼす影響について調べた結果、情動知能と共感満足に関連が見られ、また他者の感情に関する認知や共感をベースに、他者との人間関係を適切に維持することのできる能力である「対人対応」、集団を取り巻く状況に応じて能力を使い分ける統制力である「状況対応」が、それぞれ共感満足に関連していることが明らかとなり、情動知能は共感満足に関連していることが確認された。このことから、情動知能は教育や学習を通して改善・習得されるものであり、看護における感情対処に対する方策の一つとして期待される。一方、情動知能は共感疲労とは関連していないことが明らかとなった。看護師の共感疲労には、自己認識を効果的に行い、人間関係をはじめとした環境への適応や対処を促進す

る情動知能以外に影響を及ぼす因子があることが示唆された。

結論： 情動知能は、共感満足の向上に寄与することが示唆されたため、今後の看護教育などに活用が期待される。一方、共感疲労については、情動知能では説明が不十分であることが確認された。今後の看護師の共感満足・共感疲労への対処の方策としては、自己認識を効果的に行い、人間関係をはじめとした環境への適応や対処を促進する情動知能を高めると同時に、個人では対処ができない課題を整理する組織的な方策も必要とされる。